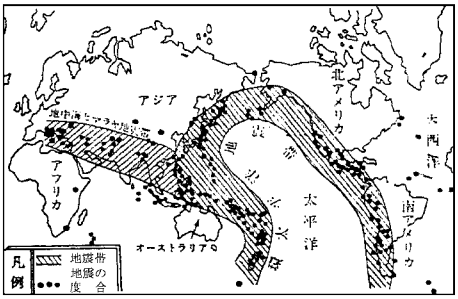
(2) 地震はどこでおきる

地球上で地震のおきた分布をみると、地震のおきるところが帯のように集まっています。これを地震帯といいます。この地震帯は過去の記録から主に太平洋周辺で、アリューシャン列島、日本列島、フィリピン、ニューギニアを経て、ニュージーランドに至る地域と、南北アメリカ大陸の西海岸を結んだ環状地帯で、これを環太平洋地震帯と呼んでいます。また、ジャワ、スマトラ、マレー半島から中国、ヒマラヤ、トルコを経て地中海に至る欧亜地震帯（ヨーロッパアジア地震帯）があります。

日本は環太平洋地震帯にすっぽり入っております。この環太平洋地震帯は、世界の地震の八〇パーセントを占めているので、わが国は「地震国日本」という、割の合わない災害国で有名になっております。

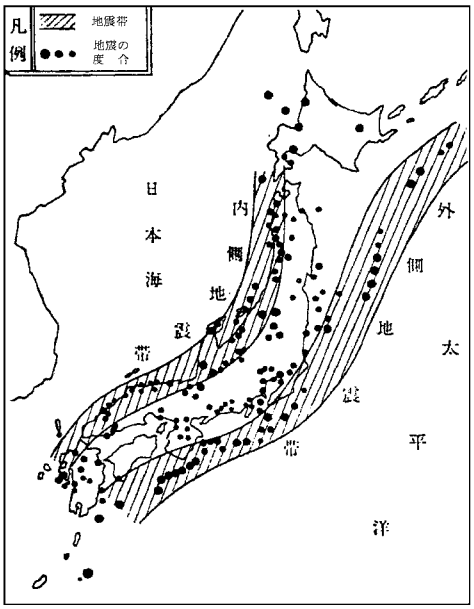
▽世界の地震帯



さて、その地震は日本のどこでおきているかというと、地震帯は二つに大きく別れております。それは日本列島をはさんで、内側地震帯と外側地震帯で、表日本にマグニチュード八以上のものが集中しております。

マグニチュード七程度の地震は太平洋側ばかりでなく、日本海沿岸と陸地におこることも珍らしくありません。このクラスといえども、地震が陸地でおこるときは、被害は非常に大きく、広い範囲におよぶことになります。

▽日本の地震帯



(3) マグニチュード

地震のエネルギーの大きさを表わすのに、マグニチュードという尺度があります。「今度の地震の規模はマグニチュード七・九」というように使われますが、これは一定の方式があって、これに地震計の記録した最大振幅と震源までの距離などをいれると、マグニチュードの値が計算できるようになっております。

これはアメリカの地震学者リヒターが、星の明るさを表わすのに用いる等級と同じように地震の大きさにも等級を定めることを提唱し採用されたものです。

太平洋戦争で広島に落とされた原子爆弾は、マグニチュード六の地震に匹敵しており、関東大震災は、マグニチュード七・九で、広島型原爆の約六五〇発分にあたり、今までの最大級の地震記録は、一五五六年中国で起きたマグニチュード八・八（推定）のようであります。

(4) 震度とはなにか

震度とは、地震の大きさではなく、ある場所でのゆれ方の度合をいうもので、ある地点で感じる地震のゆれの強さを表わすための尺度として、震度いくつという表現が使われています。これを段階別に色別したものを「震度階」とよんでいます。

現在、日本で使われている震度階は、一九四九年に気象庁が定めたもので七段階に分れています。なお外国では、それぞれの実情に応じて、ロッンフォール震度階（十段階）や、メルカル震度階（十二段階）が使用されております。

マグニチュードの大きい地震でも距離が遠ければ震度は小さいわけです。気象庁の震度階の説明によりますとつぎのとおりです。

▽震度0 ―無感

つり下げ物がわずかにゆれるのが目視されたりカタカタと音が聞こえても体にゆれを感じなければ無感です。

▽震度1 ―微震

静かにしている場合ゆれをわずかに感じ、その時間も長くない。立っていては感じない場合が多い。

▽震度2 ―軽震

つり下げ物の動くのがわかり、立っていてもゆれをわずかに感じるが、動いている場合には、ほとんど感じない。眠っていても目をさますことがあります。

▽震度3 ―弱震

ちょっとおどろくほどに感じ、眠っている人も目をさますが、戸外に飛び出すまでもなく恐怖感はない。戸外にいる人もかなりの人に感じるが、歩いている場合感じない人もいます。

▽震度4 ―中震

眠っている人は飛び起き、恐怖感を覚えます。電柱、立木などのゆれるのがわかり、一般の家庭の瓦がずれることがありますが、まだ被害らしいものではありません。軽い目まいを覚える程度です。

▽震度5 ―強震

立っていることはなかなかむづかしい。一般家屋に軽微な被害が出はじめます。軟弱な地盤では割れたりくずれたりします。すわりの悪い家具は倒れることがあります。

▽震度6 ―烈震

歩行がむづかしく、はわないと動けません。

▽震度7 ―激震

家屋の倒壊が三〇パーセント以上におよび、山崩れ、地割れ、断層ができます。

以上、気象庁発表の震度の新しい基準であります。

（次号へつづく）

都留市消防団の役員が一部変わりました

副団長　前田　進
宝分団長　矢竹利光
宝副分団長　奥秋皎明